

〈仏護註・目次〉

第1章

本論 1

著述の意味 1

縁起生は極辺から離れると説かれた面から、教示者を賞賛する 1

総義 1

この言葉に論書の著述内容等が含まれ、差別事（主体）において八の差別法（特質）が具わるさま 1

それに対する他派の反論を斥ける 4

「滅」等の数と順序に対する反論を斥ける 4

縁起生は八つの極辺と離れると説明する方法 7

章の著述それぞれの意味を説く 7

縁起生は本性として空であると示す 7

本義 7

二無我を要約して示す 7

因果の行為と行為するものを考察して法に本性を否定する 7

章の著述を説く 7

結果に生の本性を否定する 7

四極辺の生を否定する 7

生を否定する宗（主張命題） 7

生を否定する正理 8

自生を否定する正理 8

他生等を否定する正理 8

三極辺の生を否定する 8

四極辺を否定して成立した意味 8

他生の否定に経証が矛盾するという反論を斥ける 8

経証と矛盾するという反論を挙げる 8

経証との矛盾を斥ける 9

生じさせるものに縁の本性を否定する 11

縁の本性を共通に否定する 11

行為するものの面から縁であると分別することを否定する 11

生じる行為を成させる理由によって縁であると分別することを否定する 11

果が生じる理由によって縁であると分別することを否定する 13

行為対象の面から縁であると分別することを否定する 14

それぞれに否定する 15

因縁の定義を否定する 15

所縁縁の定義を否定する 16

等無間縁の定義を否定する 18

II

増上縁の定義を否定する 20

共通に否定する別の方法を示す 20

結果が起こる理由によって縁に本性が有ることを否定する 20

結果が縁である・なしの本性として成立したことを否定する 22

縁と縁でないものの確定した本性を否定する 23

章の名を示す 24

第2章

行き来の行為と行為するものを考察して人（プトガラ）に本性を否定する 25

章の著述を説く 25

詳細に説く 25

業と行為者において、行為をそれぞれに否定する 25

業を考察して否定する 25

三つの道において共通に行為を否定する 25

「歩く」において行為を特別に否定する 26

対論者を置く 26

それを否定する正理 26

対象を表す言葉と行為を表す言葉において、一方に意味があればもう一方に意味が欠如する 26

双方に意味があれば、途方もない背理となる 27

行為者を考察して否定する 28

行く者が行く（行為）の拠所として有ることを否定する 28

三種の人において、行く（行為）を一般的に否定する 29

行く者に行く行為を個別に否定する 29

行為が有る理由を否定する 31

最初の始まりが有ることを否定する 31

行く所である道が有ることを否定する 32

行く（行為の）対処が有ることを否定する 34

最後の止まることを否定する 35

留まる理由を否定する 36

行為を考察して否定する 36

「行く者」と「行く（行為）」において、同一か別かと考察して否定する 36

「行く者」とする行為に、第二の行為の有無を考察して否定する 38

業と行為者において、行為を共通に否定する 40

まとめ 41

章の名を示す 41

第3章

二無我を詳細に説く 42

法とプトガラをそれぞれに分けて説く 42

法の無我を説く 42

三法（現象）の無我を説く	42
處（六根六境）に法我を否定する	42
章の著述を説く	42
対論者を置く	42
それを批判する	42
「視る」の三法（現象）が本性として成立することを否定する	42
視る行為者を否定する	42
眼が視る行為者であることを否定する	42
自らを視ないという理由によって否定する	42
理由を挙げる	43
不確定因を斥ける	43
意味を要約する	45
視る行為と関係する・しないを考察して否定する	46
我が識が視る行為者であることを否定する	46
視る行為対象と行為を否定する	48
その正理を他にも適用する	49
章の名を示す	50

第4章

蘊に法我を否定する	51
章の著述を説く	51
色蘊が本性として有ることを否定する	51
他の意味として有るものに因果を否定する	51
有無と似不似に因果を否定する	52
その正理を他に適用する	54
論争や説明する際に、返答をする仕方	55
章の名を示す	56

第5章

界（元素）に法我を否定する	57
章の著述を説く	57
六元素が本性として成立したことを否定する	57
虚空の元素が本性として成立したことを否定する	57
虚空の元素において性相と名相を否定する	57
事相を否定する	57
性相が当てはまることを否定する	57
前後を考察して性相が当てはまることを否定する	57
性相の有無を考察して性相が当てはまることを否定する	58
それによって事相を否定したと示す	59
性相を否定する	59

まとめ	59
事物として・無事物として成立することを否定する	60
本義	60
反論を斥ける	61
諸批判のまとめ	61
その正理を残りの元素へも適用する	62
有無の辺見を叱責する	62
章の名を示す	63

第6章

それに我が有る理由を否定する	64
依拠するものである全くの煩悩が有ることを否定する	64
章の著述を説く	64
貪欲と欲す者が本性として有ることを否定する	64
前後して起こることを否定する	64
貪欲の以前に欲す者の有無を否定する	64
欲す者の以前に貪欲の有無を否定する	65
一緒（同時）に起こることを否定する	66
相互関係が無いので、一緒であることを否定する	66
同一と別において、一緒であることを否定する	67
同一と別において、一緒であることを一般的に否定する	67
別において、一緒であることを特別に否定する	68
別として成立していないので、一緒は成立しない	68
別として成立したならば、一緒は必要性が無い	69
別が「一緒」に対応するならば、相互依存すると示す	69
諸批判のまとめと、その正理を他にも適用する	70
章の名を示す	71

第7章

性相（定義）である生壊住が有ることを否定する	72
章の著述を説く	72
対論を述べる	72
それを批判する	72
有為の定義が本性として成立したことを否定する	72
総体の定義を否定する	72
三定義を共通に否定する	72
有為である・ないと考察して否定する	72
それぞれか集合の何れであるか考察して否定する	74
他の定義が有る・無いと考察して否定する	77
背理を挙げる	77

論駁の返答を否定する	78
第一の背理の論駁を否定する	78
論駁を述べる	78
それを否定する	78
第二の背理の論駁を否定する	80
論駁を述べる	80
それを否定する	80
例を否定する	80
主張命題に批判を述べて否定する	80
理由が定かではない（不定因である）と示して否定する	82
本義を示す	82
意味を否定する	82
それぞれに否定する	83
生が本性として成立したことを否定する	83
生じさせられるものを、三時制で分析して否定する	83
共通、個別に生を否定する	83
三時制の生を共通に否定する	83
「生じつつある」を個別に否定する	84
否定への反論を斥ける	86
三時制の「生」を否定したことに対する反論を斥ける	86
「生じつつある」に「生」を否定したことに対する反論を斥ける	86
「生じつつある」を承認しても否定する	87
有無等の三つを分析して否定する	88
滅しつつある・ないの二つを分析して否定する	89
住が本性として成立したことを否定する	90
行為について三時制を分析して否定する	90
「滅しつつある」である・ないと分析して否定する	91
他の「住させるもの」の有無を分析して否定する	92
壊が本性として成立したことを否定する	92
「滅」を分析して否定する方法	93
三時制を考察して否定する	94
住である・ないと考察して否定する	95
その時点・他時点を考察して否定する	95
本義	95
反論を斥ける]	96
事物の有無を考察して否定する	97
他である「壊すもの」の有無を考察して否定する	97
個別の定義を否定する	99

それによって、無為が本性として成立したことも否定したと示す	99
そのように否定したことにおいて、経証との矛盾を斥ける	100
章の名を示す	100

第8章

因である業（行為）と行為者が有ることを否定する	101
章の著述を説く	101
業（行為）と行為者が自性として成立したことを否定する	101
一致する方向の行為と行為者が自性として成立したことを否定する	101
始めの二分類の行為と行為者を否定する	101
主張命題を置く	101
理由を示す	101
第一命題の理由	101
誰も為していない業が有るという背理で否定する	101
何も為さないことに行為者が有るという背理で否定する	102
第二命題の理由	103
無因となる背理によって否定する	103
それを主張することに過失を述べる	103
第三分類の行為と行為者を否定する	105
不一致の方向の行為と行為者が自性として成立したことを否定する	106
それぞれの行為者が、方向の違うそれぞれの業（行為）を為すことを否定する	106
方向の違う業（行為）を二つずつ為すことを否定する	106
世俗名称として業と行為者を設ける方法	108
その正理を他に適用する	109
章の名を示す	111

第9章

プトガラ（人）の無我を説く	112
プトガラ（人）が本性として成立したことを否定する	112
章の著述を説く	112
対論を述べる	112
それを批判する	112
近取者が自性として有ることを否定する	112
他派が考察した我を否定する	112
取る者が、取られる対象一切の以前に有ることを否定する	112
取られる対象より前であれば、「取者」と名付ける因（理由）が無いことで否定する	112
取る者が前であれば、取られる対象に留まる拠所が無いことで否定する	113
取られる対象それぞれの以前に有ることを否定する	114
対論を述べる	114
それを批判する	115

取られる対象一切の以前に有る理由を否定する	116
それによって近く取られる対象も本質として有ることを否定したと示す	117
近取者が自性として無いことに対する反論を斥ける	118
章の名を示す	118

第10章

プトガラ（人）が本性として有る理由を否定する	119
論証する例を否定する	119
章の著述を説く	119
火と薪が自性として有ることを否定する	119
前述していない正理によって否定する	119
同一本性を否定する	119
別本性を否定する	119
別本性であるという主張命題を否定する	119
本性として別であれば、木に相互関係しない	119
否定本義	119
木が無くして起こる	119
常に燃えている等となる	120
不定因を斥ける	121
本性として別であれば、木と接しなくなる	122
本義	122
それに対する不定因を斥ける	122
別本性であるという理由を否定する	123
相互関係する理由を否定する	123
三時制を分析して相関を否定する	123
前後時制に相関を否定する	123
同時制に相関を否定する	124
相関する法（現象）の有無を分析して相関を否定する	125
相関・非相関の双方を否定する	126
現前に見られるという理由を否定する	126
前述した正理によって否定する	127
それらをまとめる	128
その正理を他にも適用する	128
否定した意味であるとする見解を批判する	130
章の名を示す	131

第11章

論証する理由を否定する	132
生死の行為が有る理由を否定する	132
章の著述を説く	132

VIII

- 輪廻が本性として有ることを否定する 132
 - 輪廻において、始まりと終わりとの中間の部分の否定する 132
 - 生死において、前後時と一緒に（同時）を否定する 133
 - 要約して示す 133
 - 詳細に説く 134
 - 前後時制を否定する 134
 - 生が前であることを否定する 134
 - 老死が前であることを否定する 134
 - 同時を否定する 135
 - まとめ 135
 - その正理を他にも適用する 136
- 章の名を示す 138

第12章

- 依るものである苦しみが有る理由を否定する 139
 - 章の著述を説く 139
 - 苦しみが自性として有ることを否定する 139
 - 主張命題を挙げる 139
 - 理由を示す 140
 - 苦しみは自他各々が為したことを否定する 140
 - 苦しみを基として、自他各々が為したことを否定する 140
 - 苦しみを基として、自らが為したことを否定する 140
 - 苦しみを基として、他が為したことを否定する 140
 - プトガラを基として、各々が為したことを否定する 141
 - プトガラ自らが為したことを否定する 141
 - 他のプトガラが為したことを否定する 142
 - 自他各々が為していない他の理由を示す 143
 - 二つの集合が為したことと、無因であるという言説を否定する 144
 - その正理を他の現象にも適用する 145
 - 章の名を示す 146

第13章

- 単なる事物の本性が欠如すると示す 147
 - 事物が本性として有ることを否定する 147
 - 章の著述を説く 147
 - 他派に公認される経証によって、本性が無いことを説く 147
 - そのような解説は不合理であるという反論を斥ける 147
 - その経証の意味を他の様相として説くことを否定する 148
 - 経証の意味を他に説明する方法を示す 148
 - そのように説く理由を否定する 149

- 他に変化するのが本性として有る理由を否定する 149
 - 本性と他に変化することの二つは矛盾することによって否定する 149
 - 他に変化することが本性として有ることはあり得ないことによって否定する 149
- 空性が本性として有る理由を否定する 151
 - 本義 151
 - それについて、経証との矛盾を斥ける 152
 - 経典の意味を説く 152
- 章の名を示す 153

第14章

- 事物が本性として有ることの理由を否定する 154
- 会合が本性として有ることを否定する 154
 - 章の著述を説く 154
 - 会合が本性として成立したことを否定する 154
 - 主張命題を挙げる 154
 - 理由を示す 154
 - 他が本性として無いことによって、会合を否定する 154
 - 論式を挙げる 154
 - その方法を他にも当てはめる 155
 - 理由を成立させる 156
 - 理由を挙げる 156
 - それに対する論難を斥ける 156
 - 不定因であるという論難を斥ける 156
 - 不成因であるという論難を斥ける 157
 - 同一と別を分析して、会合を否定する 160
 - それによって、会合しつつある等も否定したと示された 161
 - 章の名を示す 162

第15章

- 因縁を我所（我がもの）とすることが、本性として有ることを否定する 163
 - 章の著述を説く 163
 - 諸事物が本性として有ることを否定する 163
 - 本性として有ることの理由を否定する 163
 - 本義 163
 - 本性に因縁は必要なく、矛盾すると示す 163
 - 自説における本性の定義を示す 164
 - それによって他の三極辺を否定したと示す 164
 - 否定した意味であるという見解を叱責する 166
 - 本性として有ることに批判を示す 167
 - 経証による批判 167

理証による批判 167

本性として有ると言えば、辺執を超えないと示す 168
章の名を示す 169

第16章

束縛と解脱が本性として有ることを否定する 170

本義 170

章の著述を説く 170

輪廻と涅槃が本性として成立したことを否定する 170

輪廻が本性として成立したことを否定する 170

取られものである蘊が輪廻することを否定する 170

恒常が輪廻することを否定する 170

無常が輪廻することを否定する 171

取る者である有情が輪廻することを否定する 171

蘊より別本質の有情が輪廻することを否定する 171

蘊より自とも他とも述べられないプトガラが輪廻することを否定する 171

涅槃が本性として成立したことを否定する 172

束縛と解脱が本性として成立したことを否定する 174

束縛と解脱が本性として有ることを共通に否定する 174

それぞれに否定する 175

束縛が本性として有ることを否定する 175

解脱が本性として有ることを否定する 177

涅槃の為に努めることは無意味であるという背理を斥ける 178

章の名を示す 180

第17章

束縛と解脱が本性として有ることの理由を否定する 181

章の著述を説く 181

反論 181

善・不善の構成 181

心の善・不善の構成 181

業の分類の構成 181

要約して示す 181

詳細に説く 182

二業を三業に分類する 182

三業を七業に分類する 182

それにおいて恒常と断滅を排斥する方法 183

論難を挙げる 183

それを排斥する方法 184

継続性を承認して恒常と断滅を排斥する 184

恒常と断滅の斥け方・本義	184
例を挙げる	184
意味を当てる	185
十業道を果と共に把握する	185
不失法を承認して恒常と断滅を排斥する	186
他部の返答を排斥する	186
自部の返答をする	187
要約して示す	187
詳細に説く	187
界の分類と本性	187
如何なる所断か	188
生じ方	189
滅し方	190
意味を要約して恒常と断滅を斥ける	190
返答	191
業に本性が無いので、恒常と断滅は無い	191
業が本性として有ることを否定する	193
本性として有ることに批判を挙げる	193
恒常であり非所作である背理	193
背理本義	193
それを主張することに批判を述べる	193
論書と矛盾する	193
世間での公認と矛盾する	194
異熟を無限に引き起こす背理	195
本性として有る理由を否定する	195
業が本性として有る理由を否定する	195
業と煩惱の二つともが本性として有る理由を否定する	196
業が本性として有る他の理由を否定する	196
無本性が行為を為すことを例によって示す	198
章の名を示す	199

第18章

無我の真如へ入る方法	200
章の著述を説く	200
真如へ入る方法	200
真如の見解を決定する	200
我が自性として成立したことを否定する	200
解脱を欲する者が最初に分析する仕方	200
それから無我の見解を決定する仕方	200

我と蘊が同一本性であることを否定する	200
我と蘊が別本性であることを否定する	201
それによって我所が自性として成立したことも否定したと示す	201
それが修されることで過失が退く次第	201
過失が退く次第	201
有身見の退き方	201
それへの反論を斥ける	202
取が尽きることによる生の尽き方	202
解脱を得る方法	203
それにおいて、経証との矛盾を排斥する	204
経証との矛盾を排斥する・本義	204
真如を如何様にも述べるができない理由	205
真如へ導く次第	208
真如の性相	210
聖者方の真如の性相	210
世間人の真如の性相	211
その意味は必ず論証されなければならないと示す	211
章の名を示す	212

第19章

時の本性が欠如すると示す	213
時が自性として成立したことを否定する	213
章の著述を説く	213
三時が本性として有ることを総体として否定する	213
過去に相對した・相對していない二時制が本性として成立したことを否定する	213
過去に相對した時が本性として成立したことを否定する	213
相對していない時が本性として成立したことを否定する	214
その正理を他の二時制に適用する	215
他の三つ一組である法（現象）に適用する	216
自部・他部の主張をそれぞれ否定する	217
他部（非仏教徒）が主張する時を否定する	217
自部（仏教徒）實在論者が主張する時を否定する	218
章の名を示す	220

第20章

時が本性として有る理由を否定する	221
時は果が起こる俱有縁であることを否定する	221
章の著述を説く	221
因縁の集合より生じることを否定する	221
以前の集合より生じることを否定する	221

集合より直接生じることを否定する	221
集合における有・無が生じることを否定する	221
集合において有無そのものを否定する	222
集合より間接的に生じることを否定する	223
同一時の集合より生じることを否定する	224
後時の集合より生じることを否定する	225
因そのものより生じることを否定する	225
因果は同一本質であるという説を否定する	225
因果は別本質であるという説を否定する	226
因が、果が生じる行為を準備することを否定する	226
滅した因と、留まる因が果を生じさせることを否定する	226
因は、見て・見ておらずに果を生じさせることを否定する	227
因が接して・接さずに果を生じさせることを否定する	228
果が欠如する・欠如しない因が果を生じさせることを否定する	229
空・不空である果を因が生じさせることを否定する	230
同一本性と別本性の因が果を生じさせることを否定する	231
自性として有る・自性として無い果を因が生じさせることを否定する	232
因そのものが本性として有ることを否定する	232
因縁の集合より生じることを否定する他の正理を示す	233
章の名を示す	235

第21章

時は果が生起し失壊する因であることを否定する	236
章の著述を説く	236
生壊が本性として成立したことを否定する	236
起壊が本性として有るという主張命題を否定する	236
起壊は一緒であるかないかを考察して否定する	236
主張命題を挙げる	236
理由を示す	236
失壊は生起と一緒である・一緒でないことを否定する	236
生起は壊失と一緒である・一緒でないことを否定する	237
それらの意味をまとめる	238
起壊は如何なる拠所に有るかを考察して否定する	238
尽・無尽である拠所において起壊を否定する	238
事物である拠所において起壊を否定する	240
空・不空である拠所において起壊を否定する	240
起壊は同一か別かを考察して否定する	241
起壊が本性として有る理由を否定する	242
「見える」は理由にならない	242

- その理由を示す 242
- 起壊は自らと同種・異種より生じることを否定する 242
- 事物は自と他より生じることを否定する 244
- 生壊が本性として成立したと主張すれば、恒常と断滅の過失であると示す 244
- 事物が本性として有ると承認すれば、恒常と断滅になるさま 244
- そのように承認しながらもその過失を斥ける返答を、否定する 245
- 本性として成立したことを承認して恒常と断滅を斥ける論法 245
- それを否定する返答 246
- 継続を承認しようとも恒常と断滅は斥けられない 246
- 継続そのものが本性として成立していないと示す 248
- そのように否定した意味を要約する 249
- 章の名を示す 250

第22章

- 有（輪廻）の継続は本性が欠如すると示す 251
- 如来が本性として有ることを否定する 251
- 章の著述を説く 251
- 如来が自らの性相（定義）として成立したことを否定する 251
- 取得者が本性として成立したことを否定する 251
- 如来が実質として有ることを否定する 251
- 蘊に依拠して名付けられたものが本性として有ることを否定する 252
- 蘊に依拠して名付けられた如来が本性として有ることを否定する 252
- 蘊に依拠して名付けられたならば、本性として有るのではない 252
- その二つが矛盾しない返答を否定する 253
- 自である事物が成立していなければ、他である事物は成立していない 253
- 然れば、如来は本性として無いと成立した 254
- 如来と蘊が、取者と取られる対象として、本性として有ることを否定する 254
- それらのまとめ 256
- 取られる対象が本性として成立したことを否定する 256
- その二つのまとめ 257
- それにおいて他の邪見に関するものも礎が無いと示す 258
- 誤って捉えたことによる過失を示す 261
- その正理を他にも適用する 261
- 章の名を示す 262

第23章

- 煩惱が本性として有ることを否定する 263
- 章の著述を説く 263
- 煩惱は本性があることを否定する 263
- 縁起の理由によって否定する 263

拋所は本性として無いという理由によって否定する	263
我は拋所として無いという理由によって否定する	263
心は拋所として無いという理由によって否定する	264
因は本性として無いという理由によって否定する	264
対象は本性として無いという理由によって否定する	265
因は本性として無いという他の理由によって否定する	266
貪欲と瞋恚の因が本性として成立したことを否定する	266
愚痴の因が本性として成立したことを否定する	266
誤りが本性として成立したことを否定する	266
常見が誤りとして、本性として成立したことを否定する	266
無常であると捉えることは誤りではないと、本性として成立したことを否定する	267
ただ捉えることのみが本性として成立したことを否定する	267
誤りを具えるものが本性として成立したことを否定する	268
具わるものは本性として無いので、具える者が本性として有ることを否定する	268
誤りの拋所が本性として成立したことを否定する	268
誤りが本性によって生じたことを否定する	269
誤りの対象の有無を考察して否定する	269
そのように否定することは重要であると示す	270
その理由である、それを捨て去る方法が本性として有ることを否定する	270
章の名を示す	271

第24章

それに対する反論を斥ける	272
真実を考察する	272
章の著述を説く	272
反論	272
起壊等が不合理であるという反論	272
四聖諦の修行対象と修行行為が不合理であるという反論	272
向と果が不合理であるという反論	272
三宝が不合理であるという反論	272
業の因果等が不合理であるという反論	273
それへの返答	274
他派の言説は縁起の真如を了解していない反論であると示す	274
他派が挙げた過失は自派に当てはまらないさま	274
論難が当たらない理由	274
三義を了解していない反論であると示す	274
そのような反論が（対論者は）二諦を了解していないと示す	274
了解されていない二諦の本質	274
二諦を知らねば善説の真如を知らぬ	274

二諦が示された必要性	275
二諦を誤って捉える過失	275
二諦は了解し難いので、教示者が最初に説かれていないさま	275
論難が当たらないと示す本論	276
過失が無いだけでなく、良質があるさま	276
過失を挙げた者自身にその過失が当てはまるさま	276
過失の提示者にその過失が当たる理由	276
それによって、自らの過失を他派の過失であると捉えた方法	276
それらの過失が何であるか明らかに示す	277
自派の承認は、空の意味は縁起の意味であると示す	277
そのように主張しない者にとって一切の構成が不合理であるさま	278
所知である四諦が適わない	278
四諦の智等と四果が適わない	279
三宝が適わない	280
行為者と業果が適わない	281
世間の世俗名称が適わない	282
出世間の名称が適わない	282
縁起の真如を見れば、四聖諦の真如を見らる	283
章の名を示す	283
第 25 章	
涅槃を考察する	284
章の著述を説く	284
反論	284
返答	284
事物が本性として成立した説には涅槃が不合理である	284
自説によって涅槃を認識する	285
それより他の方法で語ることを否定する	285
涅槃が四つの極辺として成立したことを否定する	285
涅槃が事物として有る・無いの、それぞれの極辺を主張することを否定する	285
涅槃は事物の極辺であるとの主張を否定する	285
無事物の極辺であるとの主張を否定する	286
二極辺を捨て去った涅槃を何処におくか	287
二極辺の見解を教示者が叱責する方法	287
その二つの極辺を主張することを否定する	287
双方でない極辺を主張することを否定する	289
涅槃を会得したものが四つの極辺として成立していないと示す	290
それによって成立した意味	290
輪廻と寂滅が平等性であると成立した	290

無記の見解の否定が成立した 291

そのように否定したことにおいて、経証との矛盾を排斥する 292

章の名を示す 292

第26章

縁起を了解する・しないことからの、輪廻への入出の仕方 293

章の著述を説く 293

順行の縁起 293

放つものの因果 293

成すものの因果 293

逆行の縁起 294

章の名を示す 296

第27章

縁起生を了解すれば悪見が退くさま 297

章の著述を説く 297

十六悪見を認識する 297

縁起を了解することによって、それに留まらぬ方法 297

世俗として映像のような縁起であるとして、それらの見解に留まることを否定する 297

前の果てに依拠した四見解の第一を否定する 297

過去時に現れた・現れていないとする二見解を否定する 297

過去時に現れたとする見解を否定する 297

否定本論 297

否定のまとめ 298

過去時に現れていないとする見解を否定する 299

まとめて、他の二見解も不合理であると示す 300

それによって、後の果てに依拠した四見解の第一を否定したと示す 300

前の果てに依拠した四見解の第二を否定する 301

恒常・無常の辺執見の始めの二つを否定する 301

辺執見の後の二つを否定する 301

後の果てに依拠した四見解の第二を否定する 303

果てを具える・具えない辺執見の始めの二つを否定する 303

辺執見の後の二つを否定する 304

勝義として一切の戲論が寂滅することによって、それらの見解に留まることを否定する 306

そのように教示する御恩を随念する礼拝 306

章の名を示す 306

末尾の意味 306